

## 戦後作文・綴り方教育史研究

— 同人誌「つづりかた通信」に見る戦後作文・綴り方教育復興の一側面 —

菅原 稔

わが国における戦後の作文・綴り方教育復興・興隆の上で大きな働きをしたと考えられる同人誌「つづりかた通信」を取り上げ、その刊行経過、目的、構成、内容、特質等を考察するとともに、その位置、意義を明らかにし、戦後作文・綴り方教育史研究の一環とした。

Keywords : 戦後, 作文・綴り方, 生活綴り方, 無着成恭, 八木 (渋谷) 清規

### 1. はじめに

わが国における戦後の作文・綴り方教育は、『新しい綴り方教室』(国分一太郎著 1951〈昭和26〉年2月28日 日本評論社)と、『山びこ学校』(無着成恭編 1951〈昭和26〉年3月5日 青銅社)を契機として復興・興隆したとされる。しかし、それ以前にも、例えば、1949〈昭和24〉年8月30日には、後に『新しい綴り方教室』としてまとめられた国分一太郎の論考「綴り方の復興と前進のために」の連載(雑誌「教育新報」—教育新報社—)が開始され、1950〈昭和25〉年11月1日には「日本綴り方の会」の機関誌「作文研究」—後、「日本作文の会」の機関誌「作文と教育」となる。—が創刊される等、戦後の作文・綴り方への胎動とも言える一連の動きが生まれていた。ある意味で、このような動きを背景として『新しい綴り方教室』や『山びこ学校』が生み出され、戦後の作文・綴り方教育は、大きく復興・興隆していったのである。

国分一太郎は、終戦(敗戦)直後—おもに1945〈昭和20〉年から1950〈昭和25〉年ごろまで—の作文・綴り方、および、それに関わる教師たちの動向を、「第一に、苦しい戦時中を生きながらえてきた人たちは、戦後そのエネルギーの大部を日本の民主化運動にささげはじめた。生活綴り方運動家の戦後教員組合運動への参加はじつに積極的であった。」「第二に、生活綴り方運動家たちは、戦前の生活綴り方運動にかけた夢と期待の実現、その現実化を、いわゆる新教育の考え方による戦後教育改革にみた。そして、

新教育の進行過程にまっしぐらに突入していった。」とした上で、さらに、次のように述べている<sup>(注1)</sup>。

…そして24年(昭和24〈1949〉年—引用者注)ごろからは、教師たちの間にも自主的教育確立の声があがってきた。無批判に受け入れてきた新教育への反省、なかなづくカリキュラムばかりや社会科学習の地につかない点から発する欠陥が、おたがいの間での批判の対象となった。また生活経験学習や心理学主義のもたらす教育方法上の浅薄さが反省のタネになりだした。

戦前の作文・綴り方は、書くことによる思考や認識の深化・拡充、自己の解放と生活課題への取り組み、認識から行動への過程を経る問題解決の方法等が見出され、独自の価値を追求する優れた教育方法として実践されてきた。しかし、戦後当初は、戦前の作文・綴り方が目指した教育の理想を、いわゆる新教育の中に見出し、与えられたものとしての民主主義、なかでも教員組合運動の中に実現しようとした。さらには、コア・カリキュラムや生活単元学習等の経験主義に立つ教育、あるいは新設された社会科学の実践の中に、その理想を見出そうとした。だからこそ、国分一太郎も、「1948年〈昭和23〉ごろまでのわたしは、思想的立場はちがうにしろ、とにかく言語活動主義の国語教育に心をかたむけていた。……一方作文教育の面では、生活綴り方の復興など考えようとはしなかった。」<sup>(注2)</sup>のである。

そのような中にも、後の作文・綴り方(教育)の源流の一つともなる動きが生まれた。それが、こ

で取りあげる、無着成恭らを中心とした「つづりかた通信」誌の刊行である。

同誌は、戦後数多く発行された児童向けの雑誌「赤とんぼ」「子どもの広場」（ともに1946〈昭和21〉年4月創刊）「銀河」（1946〈昭和21〉年10月創刊）等の投稿欄等で知り合った戦後派の若い教師たち一戦中・戦後に教師になったという意味で一の作文・綴り方を中心とした理論・実践の交流を目指す同人誌として刊行された。

本稿では、このような「つづりかた通信」誌の刊行経過、目的、構成、内容、特質、意義等について考察し、我が国における戦後作文・綴り方教育史研究の一環とする。

## 2. 「つづりかた通信」誌刊行の目的および経過

「つづりかた通信」誌創刊の背景について、無着成恭は、同誌の“創刊宣言”とも言える第1号（1950〈昭和25〉年6月）冒頭の論考「こんなものを何故作る気になったか？」で、次のように述べている<sup>(注3)</sup>。

「少年少女の広場」もついに姿を消した。「赤トンボ」や「銀河」がつぶれてからすでにひさしい。「良心的な」と云われるものが、どういうわけかつぎつぎに姿を消して行く。

…私たち教師は、あたえられる文化をうけいれようとしているだけで、私たちの手で文化を作ってみようという気がいに欠けていたのが「良心的な」ものがつぶれて行く大きな原因でなかったのか。

…それで、まず私たちの手で、私たちの教育理論を発見するために、一つ同人雑誌のようなものを作ってみようか、と考えられてきた。

…ところが、いよいよ作ろうというとき、東京の栗栖良夫先生から手紙がきて、「綴り方を発行する」ことがわかった。それで「それじゃ、私たちもそれで全力を出そうじゃないか。」ということになり、私たちの同人雑誌の件は、そのまま立ち消えになってしまった。

ところが、栗栖良夫先生や石田宇三郎先生、国分一郎先生たちがほんそう努力してくださるという話だけれども、「綴り方運動」はまだ姿をみせない。それで考えついたのがこれだ。

ここで交流の場として名前のあげられている「少年少女の広場」「赤とんぼ」等は、教師を対象とした、教育の理論や実践を掲載し紹介する雑誌ではない。あくまでも、児童・生徒を対象とした学習雑誌であり、その一部のページに、作文・綴り方作品が掲載されるものであった。教師たちは、その作文・

綴り方のページに取りあげられている作品（児童・生徒の文章）に添えられた学校名や指導者としての教師の名前をもとに知り合い、文通や文集の交換を行う等、つながりを深めていた。そのような「少年少女の広場」や「赤とんぼ」等で始まった交流の場を自らの手で作ることを目指して、「つづりかた通信」誌は創刊されたのである。

なお、この「つづりかた通信」誌創刊の際に無着成恭が呼びかけたのは、大沢芳美（山形）、水野徳三郎（岐阜）、八木（渋谷）清視（兵庫）、大江田貢（熊本）の4名とのことである<sup>(注4)</sup>が、「つづりかた通信」誌の同人は、第1号の「会員名簿」では8名、第2号では19名と徐々に増加し、後、栗栖良夫を中心とした「日本綴り方の会」の機関誌「作文研究」の一の「日本作文の会」の機関誌「作文と教育」となる一の創刊の際には、その会員130名のうち80名が「つづりかた通信」誌の同人であったとのことである<sup>(注5)</sup>。

この点からも、この「つづりかた通信」誌が果たした一つの役割を見ることが出来る。

「つづりかた通信」誌各号は、孔版印刷、B5版二つ折り袋とじの体裁で、1950〈昭和25〉年6月から10月までの間に刊行され、誌齢4号を数える。いま、各号の刊行された月、および持ち回りの刊行者名、総ページ数をあげると、それは、次のようになる。

第1号（6月）無着成恭	19ページ
第2号（8月）無着成恭・鈴木千里	17ページ
第3号（9月）八木清視・黒坂勝巳	30ページ
第4号（10月）大沢芳美	20ページ

上の「つづりかた通信」誌各号の刊行者のうち、鈴木千里、大沢芳美は、いずれも山形県の教師であり、無着成恭と同様に、須藤克三の薫陶によって作文・綴り方教育に取り組んだ教師である。また、黒坂勝巳と八木清視は、ともに同じ兵庫県の同じ学校の教師であり、近接する学校の東井義雄を通して作文・綴り方と出会っている。また、この5人を初めとする同人は、「つづりかた通信」誌第2号所収の「同志名簿」によれば、上の「日本綴り方の会」の動向を知らせる栗栖良夫を除き、いずれも1925〈大正14〉年から1927〈昭和2〉年に生まれた、「つづりかた通信」刊行当時は、まだ20代前半の、年若い教師たちであった。

なお、この「つづりかた通信」誌が1950〈昭和25〉年10月の第4号までで刊行を停止しているのは、同年11月に日本綴り方の会の機関誌「作文研究」が創刊された（この「日本綴り方の会」の機関誌「作文研究」が『綴り方運動』はまだ姿をみせない、そ

れで…」と言われていた「綴り方運動」を指す。) ことによる。「作文研究」の創刊によって、「つづりかた通信」誌の果たす役割は終わったものとされ、その刊行も停止されたのである。以後「つづりかた通信」誌の同人は「日本綴り方の会」の同人となり、その機関誌「作文研究」(「作文と教育」誌)で大きな役割を果たすことになる。

### 3. 「つづりかた通信」誌の構成と内容

いま、「つづりかた通信」誌各号の目次・構成を取り出すと、それは、次のようになる。(各号の見出しの冒頭の①②等の数字は、引用者が付けたものである。また各目次項目末の( )は執筆者名、[ ]は引用者による注、〈 〉はページ数を示している。)

#### ◎第1号〈全19ページ〉

- ①一、こんなものを何故作る気になったか? (無着成恭) 〈1〉
- 二、この「つづり方通信」でなにをするか?
- 三、通信のいじのために
- ②提案二つ 認定講習の合理化 (無着成恭) 〈3〉
- ③中学卒業生のつづり方 (無着成恭)
- ④私たちは何故つづり方をだいにするか (無着成恭) 〈4〉
- ⑤文集のあとがきをめぐる [22冊の文集の「あとがき」の抜粋] (無着成恭) 〈9〉
- ⑥会員名簿 [8名の会員名簿] 〈17〉
- ⑦綴り方運動 (無着成恭) 〈17〉
- ⑧提案二つ 全国の綴り方教師よ結集せよ!! (八木清視) 〈18〉
- ⑨生活綴り方の遺産を守るために (無着成恭) 〈19〉
- ⑩ぺんだこ〈あとがき〉 (無着成恭) 〈19〉

#### ◎第2号〈全17ページ〉

- ①提案・出版無盡について (渡辺政太郎) 〈1〉
- ②児童の作品ものせる (浦山省吾) 〈2〉
- ③提案一つ・ついたり二つ (無着成恭)
- ④私たちは何故つづり方を大切にするか (水野徳三郎) 〈3〉
- ⑤綴り方理論・作文への一考察 (加藤千秋) 〈9〉
- ⑥ ・二つの作文観 (久保田仁)
- ⑦ ・綴り方通信に寄せて (吉原 正) 〈10〉
- ⑧「日本綴り方の会」発足 (栗栖良夫) 〈12〉
- ⑨同士を語る (八木清視) 〈13〉
- ⑩綴り方と作文 (阿奈尾梅郎) 〈15〉
- ⑪会員名簿 [11名の会員名簿] 〈16〉
- ⑫私は次のような本を持っています。ご利用してください。〈17〉

#### ◎第3号〈全30ページ〉

- ①八木清視兄への手紙 (無着成恭) 〈1〉
- ②入会のごあいさつ (黒坂勝巳) 〈7〉
- ③無着兄へ寄せる (八木清視) 〈9〉
- ④再び八木兄への手紙 (無着成恭) 〈17〉
- ⑤無着兄よありがとう (八木清視) 〈19〉
- ⑥会員だより [会員11名からの近況報告] 〈21〉
- ⑦全国実践家の同人雑誌刊行 (来栖良夫) 〈23〉
- ⑧てっぺ的な共同批判を (宮田博之) 〈24〉
- ⑨つづりかた通信をよみて (水野徳三郎) 〈25〉
- ⑩私の作文指導 (黒坂勝巳) 〈29〉

#### ◎第4号〈全20ページ〉

- ①ふたたび出版無盡について (渡辺政太郎) 〈1〉
- ②出版無盡のこと (無着成恭) 〈2〉
- ③生活第一 (土井 清) 〈3〉
- ④二学期のはじめにあたり (八木清視) 〈6〉
- ⑤二つの作文観 (久保田仁) 〈8〉
- ⑥色々な子ども (徳永正定) 〈9〉
- ⑦水野兄へ (無着成恭) 〈11〉
- ⑧八木清視兄に (大沢芳美)
- ⑨通信五つ [無着成恭への五通の手紙] 〈13〉
- ⑩いいわけ5つ、意見2つ (無着成恭) 〈17〉
- ⑪生活語を育てる (吉原 正) 〈18〉

上の目次・構成の言葉からも、各項目の内容と、この「つづりかた通信」誌が持っていた性格・特質のおおよそを理解することができる。

いま、掲載されている項目の中で、「会員名簿」「あとがき(ペンだこ)」「編集後記」を除くと、最も多いのは「通信・連絡・書簡(手紙・葉書)」の形をとるものであり、それは、この「つづりかた通信」誌が、同人を結びつける、文字通りの通信誌としての性格を持っていたことによると思われる。

そのような中であって、第1号所収の、無着成恭の「私たちは何故つづり方をだいにするか」、および、第2号所収の水野徳三郎の「私たちは何故つづり方を大切にするか」は、比較的長文(無着成恭のものは5ページ、水野徳三郎のものは6ページ)の論考であり、それぞれの立場に基づく「作文・綴り方教育原論」とも言えるものである。これらは、いずれも、この当時(1950〈昭和25〉年当時)のまとまった作文・綴り方教育論として、注目される。

また、第3号の①から⑤までには、無着成恭と八木清視との間に交わされた4編の往復書簡が掲載されている。この往復書簡は、八木清視から届けられた文集(学級文集・文芸部の文集等)について、無着成恭がいくつかの疑問を①の「八木清視兄への手紙」で書き送り、それに対して八木清視が③の「無

着兄へ寄せる」で回答・反論したことに始まる。ここでは、戦後の作文・綴り方の中で繰り返し論議されてきた「表現か内容か」の問題が取りあげられており、戦後の最も早い時期の“作文・綴り方論争”として注目される。

なお、この往復書簡は、後、若干の加筆・修正の上、「日本綴方の会」の「作文研究」誌の第2号（1951〈昭和26〉年2月1日刊）に「特集・作文教育の開拓」として再録されている<sup>(注6)</sup>。

#### 4. 「つづりかた通信」誌所収論考の考察

ここでは、上に取りあげた、無着成恭の「私たちは何故つづり方をだいじにするか」、水野徳三郎の「私たちは何故つづり方を大切に使うか」、さらに、八木清視と無着成恭との間で交わされた4編の往復書簡を中心に、「つづりかた通信」誌所収論考について考察を加える。

まず第一に、「つづりかた通信」誌第1号（1950〈昭和25〉年6月）所収の、無着成恭「私たちは何故つづり方をだいじにするか」である。

この論考は、次のように構成されている。

まえがき

1. 私は綴り方を知らなかった
2. 女教師の記録など
3. 教育雑誌を知らなかった
4. 北方への道

1948〈昭和23〉年3月に師範学校を卒業して教職についての無着成恭は、当初から作文・綴り方についての十分な知識を持っていたわけではない。むしろ「つづり方はイモン文だとさえ思っていた」とのことである。教職につきながら満たされなかった思いを「先輩の須藤克三という先生に話したら、『つづり方でもかかせてみる。』と云われた。だから書かせてみた。しかし、どれもこれも似たようなつづり方ばかりで、見るのがいやになってしまった。」<sup>(注7)</sup>というのが無着成恭の作文・綴り方との出会い（1948〈昭和23〉年7月ごろ）であったという。さらに、何気なく手にした（同年8月ごろ）平野婦美子の『女教師の記録』（1940〈昭和15〉年4月18日西村書店）を『『私のように悩みぬいて、生命がけの教育を実践した人々がおった。』ということが私に限りない力をあたえてくれたのだった。』<sup>(注8)</sup>と受け止め、その後、「9月はいつてからのある日、須藤先生に、国分先生や村山俊太郎先生のこと、生活綴方のこと、『教育生活』という雑誌のこと、などを聞いて、すっかりコウフンしてしまったのだった。国分先生にいろいろと質問の手紙を出したのは、十月ごろからだ。』<sup>(注9)</sup>」とのことである。

この記述は、後の『山びこ学校』の「あとがき」の次のような文章とも符合する<sup>(注10)</sup>。

もちろん、それまでも綴り方を書かせてきたのですが、綴り方で勉強するために書かせたものではなく、ただ漫然と綴り方を書かせてきたのでした。目的のない綴り方指導から、現実の生活について討議し、考え、行動までも押し進める綴り方指導へと移っていったのです。生活を勉強するための、ほんものの社会科をするための綴り方を書くようになったのです。それは、一九四八年の十二月『いなかの生活』を取扱う頃からです。そして、この本におさめられている綴り方はそれ以後、おもに中学二年時代に、みんなで勉強するために書かれた綴り方なのです。

「つづりかた通信」誌の第1号に収められている論考「私たちは何故つづり方をだいじにするか」は、無着成恭が作文・綴り方と出会い（1948〈昭和23〉年7月ごろ）、それを自らの実践の中心に据えることを決意し（1948〈昭和23〉年9月ごろ）、実践に取り組み始めて（1948〈昭和23〉年12月ごろ）から1年6か月後、『山びこ学校』に取り上げられた作品の指導（1949〈昭和24〉年4月から1950〈昭和25〉年3月まで）を終えたのち（1950〈昭和25〉年6月）に執筆されたものである。

無着成恭は、戦前に集積された膨大な作文・綴り方教育（実践・理論）に学んで『山びこ学校』の指導に取り組んだわけではなかった。それは、戦前の作文・綴り方（理論・実践）について次のように述べていることから理解することができる<sup>(注11)</sup>。

私がここでいいかかったことは、先輩が残して呉れた偉大な文化遺産を私たちのために正しく受けつがせて欲しいということであった。

だから先輩に対しては必要以上に、経験を語ってもらいたいということ。例えば私が「千葉春雄」という名前を知ったのは、新日本教育創刊号に出た国分一太郎の「最小限度のうったえ」であるし、「北方教育」などというコトバがあるのを知ったのは、カリキュラム二月号の今泉運平氏「現代教育の悲劇」であり、同誌四月号に国分氏が今泉氏に答えた論文などである。そういうことがらが、私たち二十代教師はぜんぜん知らないということを知っていただきたいということであった。

すでに取り上げたように、無着成恭は「生活を勉強するための、ほんものの社会科をするための綴り方を書く」ことをめざした実践を行い、『山びこ学校』に至る優れた生徒作品（文章）を生み出して行った。しかし、その指導がどのような位置にあり、どのよ

うな理論的背景や意義・目的等を持つものかを明らかにしていたわけではなかった。だからこそ、『山びこ学校』に至る実践を終えた後で、『ほんものを書け、ありもしないことを書かないんだ。』としか云えなかった。たったそれだけだった。私自身『ほんもの』というものを理論的に知っていたわけではなかった（もちろん今でもわかったわけではない）。しかし、文学青年でなかった私は、ウソとホンモノをリアルな感覚で見分ける外にしかたがなかった。<sup>(註12)</sup>と述べるのである。もちろん「ほんもの」を書かせるために、具体的な表現の技能・方法の指導が行われたことは確かである。ただ「ほんもの」を書くように指示をするだけでは、児童・生徒の文章表現力は育たないからである。したがって、そのような表現の技能・方法の指導が様々に模索されたことは想像に難くない。また、「ウソとホンモノをリアルな感覚で見分ける」ための文章観や児童・生徒観を確かにすることも必要であったと考えられる。これまでに、何をめざして、どのような指導が行われてきたのか、それによって、どのような成果があげられてきたのか、それを知るために、「先輩が残して呉れた偉大な文化遺産を私たちのために正しく受けつがせて欲しい」と述べるのである。

無着成恭は、須藤克三から聞かされるまで、また、平野婦美子の『女教師の記録』読むまで、戦前の作文・綴り方教育について、また、その優れた歴史や集積された膨大な成果について、何も知らなかった。もちろん、「北方教育」という同人雑誌の中で「先輩たちが、意見を交換し合い、綴り方の一つ一つの具体的な指導方法の公開、児童観の叩き合い、文学観の研究討議から、必然的に探し求め、行きついたもの」<sup>(註13)</sup>の内容を知らなかった。だからこそ、「私は綴り方を知らなかった」し「教育雑誌を知らなかった」と述べる。かつての「北方教育」に代わる「教育雑誌」である「つづりかた通信」を刊行し、「北方教育」に集まった「先輩たち」に負けない努力によって、今、「先輩が残して呉れた偉大な文化遺産」を自らが引き継ぎ、新たな作文・綴り方教育を切り開こうとしたのである。

第二に、「つづりかた通信」誌第2号（1950〈昭和25〉年8月）所収の、水野徳三郎「私たちは何故つづり方を大切にするか」である。

この論考は、次のような5つの柱によって構成されている。

1. まえがき
2. つづり方を知ったのは
3. 学級経営につづり方を生かす
4. 土の子ども

## 5. むすび

水野徳三郎は、前任者である佐藤茂が職員室に残した文集を通して作文・綴り方教育を知ったとのことである。やがて、感情や意見を外に向かって表現しない児童との接し方に悩み、児童を理解するための一つの手段として作文・綴り方を用いることを思いつく。あくまでも、作文・綴り方によって自らを見つめ考える児童、自己を表現する児童を育てる、さらに、一人ひとりの児童の書いた文章によって教師としての自分が一人一人の児童の思いや考えを知ることを目指したのである。

先に取り上げた無着成恭は、作文・綴り方によって「生活を勉強するための、ほんものの社会科をするための」指導を行おうとした。また、水野徳三郎は、「生きることの切実な問題は山ほどあるのに時たまの作文には花が咲き鳥がうたう」と書く子供たちを「自分の考えを率直にいうところから始まるという民主人」<sup>(註14)</sup>に育てようとした。その意味からは、水野徳三郎も無着成恭も、作文・綴り方に取り組む目的は共通する。ともに、国語科作文指導の中だけにとどまらず、より広く、作文・綴り方によって、生活指導、社会科の指導、さらには、児童理解を図ろうとしたのである。児童の書いた文章が、その思考や認識を正しく反映したものであるためには、言い換えれば、生活指導、社会科の指導等に生きて働くものにするためには、まず何よりも、ありのままに正直に書かれた文章が求められる。また、概念的・観念的にではなく、具体的に詳しく書かれていることも必要である。このようにとらえるならば、書くことを書くことと意識しない、文章表現の技巧や上手・下手を意識しない、手段・方法としての指導によってこそ、逆に、優れた文章が生み出されたとも考えられる。ここに、無着成恭や水野徳三郎が目指した作文・綴り方（教育）があったとらえられる。

このような、児童を理解するための手段・方法としての作文・綴り方指導を、水野徳三郎は次のように述べている<sup>(註15)</sup>。

ガヤガヤと自分勝手なおしゃべりが続くのである。それでも一応話の出来る子どもはまだしも大半の子どもは何を話しかけても仲々自己を語ろうとしない。目で顔で物を言っている子どもたちの心をどうして知ったらいいであろう。子どもたちの率直なありのままの姿を考えを知るにはいろいろな方法があろうが、私のような人間にはその姿を考えを本物であるかどうか見合わせるためには、つづり方が一番手っ取りばやいと気がつき、かつての東京の佐藤先生の組の

姿が思い浮かんだ。

そこでまず日記から始めた。五十三人の子どもたちを八つのグループにわけ一週間に一度づつ、日記を出させ、それを根気よく見て赤ペンを入れてやった。

水野徳三郎は、佐藤茂の残した文集にうかがえる日記から文集への指導を自らの実践の中にも取り入れ、一週に一度、自由な話題・題材で書いた日記を提出させ、赤ペンによって一人一人の児童との対話を行う。さらに、その児童の文章の中から幾つかを文集に取り上げて学級の中で読み合い話し合う指導を丹念に行う。もちろん、児童の書く日記は、初めから個性的な満足の出来るものではなかったはずである。むしろ先にあったように「花が咲き鳥がうたう」ものから出発したであろうことは容易に想像ができる。しかし、そのような概念的で安易な日記に対して、それが作品として劣るからではなく、「子どもたちのこころ」を正直に語るものでも「率直なありのままの姿を考えを」語るものでもないからこそ、赤ペンで語りかけ、文集に取り上げて読み合い話しあう。それによって、児童の思考・認識が深まり個性的な日記が生まれるのを待つ。このような日記から文集への指導によって、児童は様々な問題に気づき、個性的な表現や言葉を選ぶことができるようになったのである。

このような自らの日記から文集への作文・綴り方指導について、水野徳三郎は、次のようにまとめている<sup>(註16)</sup>。

イ. 教室で発表しない子どもたちも深い考えをもっている—口で発表することが下手であまり発表しない子も、文字では割にすなおに語っている。—

ロ. 気らくにしゃべるようになった—作文の批評会で答えたりきいたりするうちに。—

ハ. 悪口でなく忠告ができるようになった—学級の出来事や放課後の事など作文にかいて、その問題をシンポジウムすることによって。—

ニ. いわゆる出来ない子たちが文集制作に強力に参加して学級に於て大切な存在になった。そうしてそれが学習を積極的にさせた—文集の印刷、カットの版画の制作、文集の製本などから。—

ホ. 深い友情が培われた—友だちの文を読むことによって、友だちを更によく知る。—

ヘ. それぞれある程度の人生観をもつようになった。

作文・綴り方の持つ思考・認識の深化・拡充(イ)

(ヘ)、自己表現・自己解放(ロ)、さらにはお互いの文章を読み合い話し合うことによる相互理解(ハ)、仲間づくり・学級づくり(ニ)(ホ)等、日記から文集への指導が持つ様々な意義や機能について、幅広く周到な目配りがなされている。また、ここでは、その言葉(用語)は用いられてはいないものの、後、1955(昭和30)年代以降に大きな話題となる、作文・綴り方による解放から規律への学級集団づくり—生活綴り方的方法による集団づくり—も取り上げられており、注目できる。この(1950<昭和25>年)当時、すでに、作文・綴り方の意義や目的について、これだけの幅広く周到なとらえ方がされていたのである

ここで取り上げた無着成恭も水野徳三郎も、ともに、戦後に作文・綴り方に取り組んだ、いわゆる戦後派の教師である。戦前から継続して作文・綴り方(教育)を行って来た教師ではない。しかし、無着成恭の「私たちは何故つづり方をだいじにするか」、および水野徳三郎の「私たちは何故つづり方を大切にするか」にみられる考え方は、ともに、戦前の作文・綴り方の到達した考え方や方法を見事に継承しているだけではなく、戦後の新しい考え方である生活綴り方的教育方法や学級集団づくり等への萌芽も見出され、優れたものと言える。

第三に、「つづりかた通信」誌の第3号に掲載された八木清視と無着成恭との往復書簡である。

いま、この往復書簡の見出しを先の目次・構成の順に取り出すと、それは、次のようになっている。

- ①八木清視兄への手紙 (無着成恭)
- ③無着兄へ寄せる (八木清視)
- ④再び八木兄への手紙 (無着成恭)
- ⑤無着兄よありがとう (八木清視)

この4通の往復書簡は、八木清視が同時並行して刊行した7冊の文集—学級文集「ひよこ」、文芸部の機関誌「あこがれ」「なかよし」、個人文集「コスモス」、個人詩集の合冊文集「あぜみち文化」「学びの友」、文芸部作文集「作文生活」—を無着成恭に届けたことに始まる。

無着成恭は、①の「八木清視兄への手紙」<sup>(註17)</sup>で、「手がしなる程重いこれらの量」に驚くとともに、「貴兄のエネルギーをもっと整理する必要があるのではないか」との疑問を呈する。

さらに、それらの文集にうかがえる八木清視の実践に、3つの問題があることを指摘する。いま、それを箇条書きにまとめると、次のようになる。

- (1) 文芸部という「綴り方や詩の好きな子どもだけを集めて」書かせることに意味があるか。
- (2) 「雑誌に子供の作品がのった事を必ず附記

して」おり「作品主義を排けきしておりながら、しらず知らずのうち、自分が作品主義になっているのではないか。」

- (3)「綴り方や詩を、文芸とか、芸術とか、また国文学とかの中でやらせようとしている」のではないか。大切なのは「『作品』ではなくて『人生に対する態度』」であり、「詩や綴り方は、そのための教育的な手段」と考えるべきではないか。

上の3つの問題のうち、(1)については、③の「無着兄へ寄せる」<sup>(注18)</sup>で、文芸部とは週2時間のクラブ活動のことであり、ほとんどが八木清視の学級の児童であるとし、また(2)については、一方で「この投稿ということが、どれだけ自分にとっても児童にとっても効果があったか」と述べながらも、他方で、「自分の心の中に巣作っている矛盾に気がつかないおろか者だった。指摘してもらって、なるほどと、自分の馬鹿らしさに驚いてしまった。」と児童の文章がコンクールで入賞することを強く賞揚することの持つ問題を認めている。

ただ、無着成恭と八木清視との見解が大きく異なるのは(3)の問題である。

無着成恭は、あくまでも作文・綴り方は生活指導や教科指導の手段であり、大切なのは文章の背後にある児童・生徒一人ひとりの思考や認識の内容、あるいは、その広さ・深さであるとする。主体としての児童・生徒の成長を抜きにして、表現された結果としての文章だけを、言葉や表現のレベルだけで問題にするべきではない。あくまでも、なぜそのような文章を書かざるをえなかったのか、それをこそ問題にするべき「人生に対する態度」ととらえるのである。

このような無着成恭の考え方に對し、八木清視は、次のように述べる<sup>(注18)</sup>。

兄は“生活綴り方”の名に拘泥しすぎるのではないか。生活綴り方に性急すぎるのではないか。綴り方活動に対する視野が狭く、あまりにも一方的ではないだろうか。国語科の一分野としての綴り方指導であるという事実にも留意する必要はないであろうか。現実を見つめ、そこから出発する事は大事である。けれど一方に偏した綴り方を行う事により、融通性のない、暗黒なる現実面のみをさぐり、明るい少年少女的な夢を失った(中略—引用者)人間を作りはしないでしょうか。一時のようにバク露綴り方になったり、普遍性のない、反社会的なものに極端に走ったり、逆現象として、この世に生きる事に絶望するの結果になるような事は考えられはしないだろうか。

八木清視は、作文・綴り方はあくまでも国語科の一領域であり、その範囲内での表現指導であると考ええる。したがって、その考え方は、無着成恭とは逆に、「作品としての詩や綴り方」が目的であり、それを根底から支える「人生に対する態度」は、ひとり作文・綴り方だけが背負うべきものではないととらえる。生活を支える思考・認識の指導や生活の中で生じた問題を解決するための指導は、あくまでも教科指導・教科外指導の全てが分担するべきものなのである。

無着成恭は、「現実そのものよりもより高度なものをのぞむということはすでに現実の否定なのだ。だから教育活動というのは、よりよいものに向かつての現実否定なのだ。」<sup>(注19)</sup>と考える。したがって、作文・綴り方によって、現実生活の厳しさや苦しさを凝視し、それを否定的な視点から厳しく具体的に描写し表現する活動が、現実の社会や生活を変革していく力となるととらえる。このような考え方を前提とする限り、無着成恭の考え方は、八木清視が否定する「暗黒なる現実面のみをさぐり、明るい少年少女的な夢を失った」「バク露綴り方」もやむを得ない、場合によっては必要なものとなる。

このような無着成恭の考え方に對し、八木清視は、次のように述べる<sup>(注20)</sup>。

又、暗黒な生活の中によるこびを感じさせ、農村であれば、農村に生きる喜びと誇りを持たせ、生き甲斐を感じさせたい。新しい生活の途を発見させてやり、暗い現実も明るい方向へ導いてやらねばいけないという、健全な生活綴り方の一般的な姿をえがきたかったのである。

八木清視の勤務する兵庫県の三江小学校は、無着成恭の勤務する山形県の山元中学校と同様に、雪深い農山村の中の学校である。当時の環境は、決して豊かで恵まれた理想的なものではなかった。その意味で、無着成恭と八木清視の考え方の相違は、置かれている環境や状況の違いによるものではない。無着成恭は、農山村の厳しい環境や状況を否定的にとらえ、それらに反発する力を、課題や問題を克服する力にして行こうとする。それに対して、八木清視は、否定的で暗い環境や状況の中にあるからこそ、それらに負けない明るさや強さを身につけさせ、克服して行こうとするのである。

このような両者の違いは作文・綴り方を目的とするか手段・方法とするかの違いであり、より根底的には、「事実、私は、童心主義の洗れいも受けなければ、芸術至上主義の道もおとてこなかった」「私は文章をかくのがだいきらいな人間だった。綴り方はいつも丙だった。文学をしたいとか小説を書

きたいなどと一ぺんも思ったことのない男だ」<sup>(註21)</sup>という無着成恭と、「小学校時代より綴方は好きであり、将来国文学の研究を旨としていた自分が、学問と学校の仕事との矛盾に苦しみ……」<sup>(註22)</sup>という八木清視との基本的な考え方や立場の違いであることも推察される。

ただ、作文や詩を「教育的手段」であると位置づけ、大切なのは『『作品』ではなくて『人生に対する態度』』であるとする無着成恭の指導によって、当時すでに、後に公刊される『山びこ学校』所収の文章が生み出されていたことは注目に値する。

この往復書簡の中で問題になった作文や詩を目的ととらえるか手段ととらえるかの問題は、同時に、児童・生徒の思考や認識の指導、さらには生活の中の問題を解決するための指導を作文・綴り方指導に含めるのかどうかの問題にまで発展する。狭義の考え方では、作文・綴り方指導の内容は文章表現にかかわる技術・能力である。しかし、より広く考えれば、児童・生徒の思考・認識を取り上げる指導は、書く内容として作文・綴り方指導に含まれ、さらに、書くことや書かれたものを用いた生活問題の解決のための指導や生活行動のあり方を問う指導も、作文・綴り方を書く以前の基礎指導となり、また、書いた後の発展指導ともなる。

このように考えるとき、作文・綴り方指導における目的と手段の問題は、同時に、表現か内容か、技術か態度か、思考・認識か行動か等の問題に発展する。この作文・綴り方教育における二元論的なとらえ方は、戦前にも様々な形で議論され、戦後も、「作文・綴り方論争」、「『日本作文の会 62年度活動方針（案）』を巡る論争」、「野名・田宮論争」等、様々な形を変えて行われて、いまでも完全に解決してはいない。そのような、ある意味で作文・綴り方教育がその本質として持つ問題が、この「つづりかた通信」誌上においても、すでに取り上げられていたのである。

## 5. おわりに

「つづりかた通信」誌は、わが国の戦後の作文・綴り方（教育・運動）の復興・興隆のきっかけを作ったとも言える、比較的早い時期に刊行された同人誌である。この「つづりかた通信」誌で中心的役割を果たした無着成恭、八木清視、水野徳三郎が、いずれも戦後になって作文・綴り方に取り組んだ年若い教員であったこと、さらに、それぞれが、戦前の著名な作文・綴り方の理論家・実践家であった須藤克三、佐藤茂、東井義雄にそのきっかけを与えられたと述べていることは、注目に値する。わが国にお

ける戦後の作文・綴り方が、戦前とは異なる、若い、いわゆる戦後派の教員によって再出発したことは、すでに言われて来たことである。しかし、その再出発を担った若い教師たちも、そのきっかけは、戦前に作文・綴り方に取り組んだ教師たちとの出会いだったのである。この「つづりかた通信」に集まっていた教師たちの熱意を原動力に、戦後の作文・綴り方（教育）は、「日本綴り方の会」の結成と機関誌「作文研究」の刊行（1950〈昭和25〉年11月1日双龍社）、「第一回作文教育協議会・中津川大会」（1952〈昭和27〉年7月15日）と進むのである。

この当時、戦前の作文・綴り方の掘り起こしや継承は、まだ十分に行われていない。その意味では手探りの状態であったが、ここに取り上げた理論・実践等が「つづりかた通信」誌に掲載され共有されていたのである。そのような意味で、我が国の戦後の作文・綴り方（教育）の復興・興隆の先鞭を付けたものとして、この「つづりかた通信」誌が果たした役割を高く評価することができる。

## 【注】

- (1) 国分一太郎「生活綴り方の十年」「教育」第52号（1955〈昭和30〉年11月） PP.37
- (2) 国分一太郎『文学と教育・文学と教師』（1957〈昭和32〉年1月31日 未来社） PP.336
- (3) 無着成恭「こんなものを何故作る気になったか?」「つづりかた通信」第1号 PP.1
- (4) 同 上
- (5) 無着成恭『『作文と教育』創刊まで』『『作文と教育』復刻版 別巻1』—1986〈昭和61〉年6月10日 岩崎書店—pp.83
- (6) 「作文研究」第2号（1951〈昭和26〉年2月1日 pp.2—9 + pp.28
- (7) 無着成恭「私たちは何故つづり方をだいにするか」「つづりかた通信」第1号 pp.4
- (8) 同 上 pp.5
- (9) 無着成恭『『山びこ学校』がでる前のこと』「作文と教育」1959〈昭和34〉年1月号 pp.35
- (10) この間の経緯は、拙稿「無着成恭『山びこ学校』の成立とその反響」（『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第138号—2008〈平成〉年5月—pp.67-74）に詳述している。
- (11) 同 (7) pp.7
- (12) 同 上 pp.5
- (13) 同 上 pp.8
- (14) 水野徳三郎「私たちは何故つづり方を大切にするか」「つづりかた通信」第2号 pp.4-5
- (15) 同 上 pp.5



- |      |      |             |            |      |                |             |           |                |
|------|------|-------------|------------|------|----------------|-------------|-----------|----------------|
| (16) | 同    | 上           | pp. 6 - 7  | 通信   | 第 3 号 pp.17-19 |             |           |                |
| (17) | 無着成恭 | 「八木清視兄への手紙」 | 「つづりかた通信」  | (20) | 八木清視           | 「無着兄よありがとう」 | 「つづりかた通信」 | 第 3 号 pp.19-21 |
| (18) | 八木清視 | 「無着兄へ寄せる」   | 「つづりかた通信」  | (21) | 同              | (7)         | pp. 8     |                |
|      |      | 第 3 号       | pp. 9 - 17 | (22) | 同              | (18)        |           |                |
| (19) | 無着成恭 | 「再び八木兄への手紙」 | 「つづりかた     |      |                |             |           |                |